松前城下の作（長尾秋水）

海城の　寒柝　月　潮に　生ず
波際の　連檣　影　動揺
此れより　五千　三百里
北辰　直下　銅標を　建てん

海城寒柝月生潮　波際連檣影動揺
従此五千三百里　北辰直下建銅標

解説　ロシアとの国境問題が騒がしかったとき、松前城下で憂国の情熱を詩に託して人々に警告を発した詩。

語釈　※海城＝海辺の街。松前城下をさす。松前氏が日本最北の松前城を築き北海道地を支配した。※寒柝＝冬の夜に打ち鳴らす拍子木。※月生潮＝満ちてくる潮と共に月が上ること。※連檣＝帆船の帆があたかも垣根のように連なっていること。※従此＝これより、と読み、ここ松前からの意。※五千三百里＝この里数がどこまでをさすかは不明。※銅標＝銅製の標識。

通釈　海辺の城下町に冬の夜まわりの拍子木の音が響きわたり、月は、満ち潮と共に上る。波打ち際に垣根のように連なる帆の影が静かにゆれている。それにつけても、この北の好景を目にして気にかかるのは、国境のことである。ここから五千三百里も離れた北極星の直下に、国境表示の銅標をうち建てたいものである。